

体育授業でのいじめ発生要素を考える

叶 俊 文

I 問題の所在

平成26年10月に文部科学省が発表した2013年度の問題行動調査において、学校が把握したいじめの件数は18万5千件で、前年度よりも12000件減少したことを示した。平成25年9月にいじめ防止対策推進法が施行されたことによる効果の表れという見方がある一方で、学校に報告のあった自殺者が増加した点からいじめへの早期発見の努力が薄れているのではないかとの見方もある。学校ではアンケートの実施や個別面談の実施、個人ノート等で実態把握に努めているが、パソコンや携帯電話を使ったいじめも増加していることから、把握の難しさも認められている。こうしたいじめは不安などによる情緒的混乱、友人関係の問題につながり、不登校や自殺にもつながっていくことが考えられる。

いじめの概念は1970年代から80年にかけて発生し、この時期からいじめっ子、いじめられっ子という表現があったことを中野(2012)は指摘している。いじめっ子といじめられっ子の関係を当時子どもたちは、目の当たりで見ることができたことから、その関係を止めさせようとする子どもたちが存在したことも事実である。ターゲットにされた子どもを何とかしなければという思いをもった子どもたちが存在したことになる。しかし、現在のいじめは見えないところで進行することもあり、表面化しないところに解決の難しさが潜んでいるようにも思われる。

ターゲットにされる子どもには何かが上手く出来ない、何か特徴的なところがあるなどのことが、他の子どもたちに認知されているという背景があるよう

に思われる。藤井(2010)はいじめ概念の基本要件として「被害の発生」「加害者の優位性と被害者の劣位性」「被害者の苦痛」「同一集団内での発生」「反復継続性」の5つを指摘しながらも、適合しない事例もみられるようになっていることを示している。「加害者の優位性と被害者の劣位性」や「同一集団内の発生」という点では、そのきっかけを体育がもたらすこともあり得る。子どもたちにとって、他の教科と異なって体育は特殊な空間になっていると思われる。学校での体育の授業は、クラス全員で一斉に進められる。その場所が体育館であれ、グラウンドであれ、一斉に行われることでクラスの全員が相互に運動しているところを見ることが出来る空間になる。相互に運動しているところを見ることが出来ることは、誰が「逆上がり」ができているのか、誰ができないのかを全員が認識できることになってしまう。当事者からみれば、自分が「逆上がり」ができないことをみんなに知られることになるという状況を生み出す。子どもによっては屈辱的な場面に遭遇することにもなる。波多野ら(1981)は運動能力の低位に対する劣等感が運動嫌いの引き金になることを指摘しているが、授業時間のクラス内ではできる者の優位性とできない者の劣位性を生起させる空間になることも考えられる。これは運動が「できる」、「できない」による差別化が起りやすい環境であることを物語っている。この差別化がいじめへのきっかけになることも大いに考えられるであろう。そのために体育授業において、どのような嫌な体験を受けたことがあるのか、あるいは嫌な思いをさせてしまったことがあるのかを考えることは、いじめに繋がるような事象を表面化させるために重要になると考える。

そこで、小学校、中学校の体育授業において、子どもたちがどのような嫌な体験をもっているのかを調査し、どのような行動が発生しているのか、どのような種目で発生しているのかを明らかにする。体育授業を介していじめを発生させるような対人関係の危機を回避する方法を検討するための知見を得ることを本研究の目的とした。

Ⅱ 方 法

1. 調査対象者

大学生を本研究の対象とした。研究者がこれまでに担当した講義を受講してきた学生を調査対象者とした。これは蓄積的なデータになるために、同一学年ということではなく、数年にわたる異世代の対象者になる。大学生の総計は262名である。

2. 調査内容

小学校と中学校の頃を振り返ってもらい、「体育の授業あるいは授業によって、悪口を言われたり、無視されたり、嫌な思いをした経験」について自由に記述してもらった。この嫌悪体験について、自分が受けた体験、相手にしてしまった体験、そのような場面を見た体験に分けて記述するようにお願いした。これは学生によって、受けた体験もあるであろうが、自分が相手に対して与えてしまったという体験のある者も存在すると考えている。また、自分には降り掛からなかったものの、場面を見ているという者も存在すると想定して、記述するように伝えている。

この3種類の場面の中で自分がどの体験をしてきたのかをできるだけ具体的に記述してもらうようにお願いした。その時の種目や状況などを含めてもらうように伝えている。

3. 調査手続き

講義内で記述用紙を配布して、研究者が口頭で内容についての説明を行った。自身が受けた体験、与えてしまった体験、見た体験を記述することを伝えた。また、そのような体験がない人は記述する必要があることを説明した。記述後に研究者が回収を行った。

Ⅲ 結 果

小学校の時の状況を記述してくれたのは148名であり、146の有効ケースが示された。中学校の時の状況を記述してくれたのは145名であり、160の有効ケースを得ることができた。どちらにおいても、半数以上の学生が具体的な内容を記述してくれたことになる。記述内容についても、嫌な思いを体験した学生、嫌な思いをさせてしまった学生、状況を見ていた学生がみられたことから、記述してくれた学生は体験を素直に記述してくれたのではないと思われる。

分析にあたって、記述内容から嫌な思いを被った内容については被験群、嫌な思いを受けた内容を授与群、そのような状況を見たという内容を傍観群として群ごとに記述内容の分類を行った。また、記述内容は嫌悪体験の原因、嫌悪体験の内容、そして授業内容によって分類した。

1. 嫌悪体験の原因

記述内容について、次のような内容に分類した。これは被験群、授与群、傍観群に共通した分類になる。ひとつは運動能力の低い者に対する状況ということになる。運動が下手であったり、上手く運動ができない自分や生徒に対して示された内容になることから「低運動能力」とした。上手くできないのでバスケットボールでパスが回ってこない、下手なのでのけものにされるなどの記述がみられる。次に、個人を狙ったようにみられる行動が記述されているものを分類した。これは運動の上手下手に関わらず、ターゲットにされているような記述内容になることから「個人的状況」とした。ここでは個人的に狙われているケースが多くなっている。もう一つ運動の上手下手に関わらず起こっている現象として、運動中にミスした者に対する行動が記述されている。ミスしたことを笑われたり、ミスを追われるという記述が含まれることから「ミス行動」として分類した。また、運動能力が高い故に嫌な経験をするという記述も認められた。ドリブルシュートを決めたことで無視されたなどという内容を含むことから「高運動能力」とした。そして、勝ちにこだわることによって生じる状況の記述が認められた。勝ちたいと思う意識が強すぎて上手な生徒たちでパス

をつないだりするなどの記述が含まれることから「仲間意識」とした。このように記述内容の嫌悪体験の原因について、「低運動能力」「個人的状況」「ミス行動」「高運動能力」「仲間意識」に分類し、これらに当てはまらない少数記述を「その他」として分類して整理した。

図1には小学校での嫌悪体験の原因についてまとめたものを示している。嫌悪体験を被ったという被験群では、自分の低運動能力に対して嫌悪体験が発生している。この低運動能力によって個人的状況でのターゲットにされていることも考えられる。嫌悪体験を受けてしまった授与群でも同じように考えられる。低運動能力の相手に対して、あるいは誰かをターゲットにして嫌な思いをさせていることになる。授与群ではミス行動に対する対応も多くなっている。授与群は比較的運動能力が高い者が含まれていることが想定できるため、ミスをした者に対して何らかの対応をしてしまうのかもしれない。被験群では高運動能力が故に嫌悪体験を被ることも認められる。また、傍観群では仲間内だけで運動を進めている姿が印象に残っているようだ。

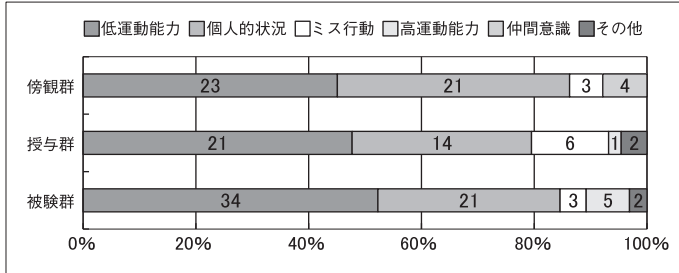


図1 小学校での嫌悪体験の原因の割合

図2は中学校での嫌悪体験の原因についてまとめたものを示している。嫌悪体験を被った被験群では自己の低運動能力に対する体験や個人的にターゲットになる経験が多い。嫌悪体験を受けてしまった授与群では低運動能力の生徒に対しての対応が多くなり、個人的状況への対応は減少している。各群で小学校よりも多くなるのはミス行動への対応になっている。被る方も、授ける方も、観ていてもミスをきっかけにして嫌悪体験が発生することがみうけられる。そして、観ている側では、仲間内だけで活動して周囲に嫌な思いをさせている場

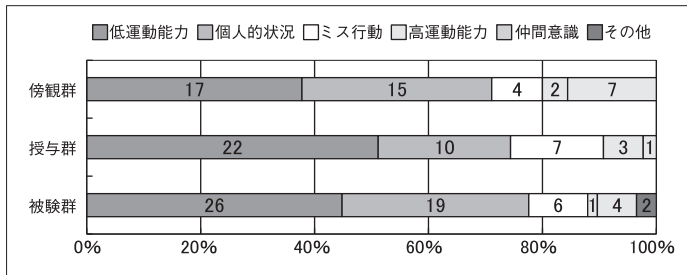


図2 中学校での嫌悪体験の原因の割合

面が気になっているようである。

嫌悪体験の原因は小学校でも中学校でも児童や生徒の運動能力の低い児童や生徒、個人的状況で嫌悪体験が発生する状況が多い。特に、個人的状況では、「みんなに嫌われている子」「体が大きい子」「太っている子」「おっとりした子」などの記述表現が多く、既に特定化されている傾向があるように思われる。これは小学校での記述に多く認められた。また、中学校ではミスに対する意識が高くなり、仲間内で進めていく傾向になっているように思われる。

2. 嫌悪行動の内容

嫌悪体験の原因に伴って、どのような行動が取られたのかを分類した。記述内容においてパスを回してもらえなかった、打席が回ってこなかったなどの内容を「のけもの行動」とした。次ぎに、からかわれたり、気になることや嫌なことを言われたなどの記述内容を「悪口・野次」として分類した。笑われたり、笑ったりしたという記述内容については「嘲笑」として分類した。運動によって責められたり、へたくそなどと言われたという記述内容は「暴言」とした。いたぶられたり、いじられたり、狙われたという行動の記述内容については「狙い行動」とした。これらに含まれない内容で、チーム分けやみんなの前で行うことへの苦痛などを記述したものを「その他」とし、少数内容の記述をまとめた。

図3は小学校での嫌悪行動の内容を示したものである。全体的にはのけもの行動、悪口・野次、狙い行動が多くなっている。被験群ではのけもの行動をとられたり、悪口・野次を言われたり、嘲笑されるということが多くなっている。

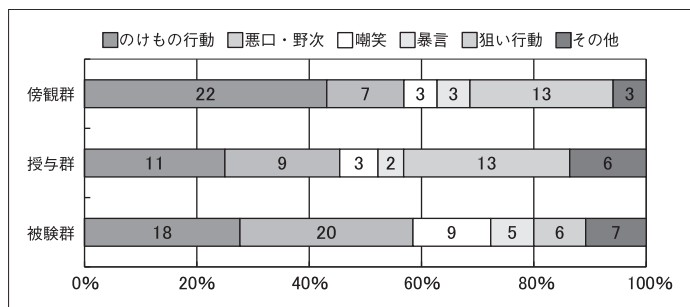


図3 小学校での嫌悪行動の内容の割合

授与群ではのけもの行動をしたり、悪口・野次を浴びせることもあるが、狙い行動をすることが多くなっている。これは授与群に運動能力の高い人たちが多いことの現れのようにも思われる。そして、傍観群ではのけもの行動と狙い行動を観たことが多くなっている。小学校全体ではのけものにしてしまう行動やターゲットを集中的に狙ってしまうという行動がとられることが明らかである。悪口・野次も多い内容であるが、中には暴言を吐かれることもあることから注意も必要になるであろう。また、その他の中には教員側の対応も含まれている。鉄棒で残されたり、チーム分けが偏っていることなども記述され、対児童だけの状況だけではないことも認められる。

図4は中学校での嫌悪行動の内容を示したものである。小学校と大きく変化するところは狙い行動が大きく減少し、のけもの行動、悪口・野次、嘲笑が多

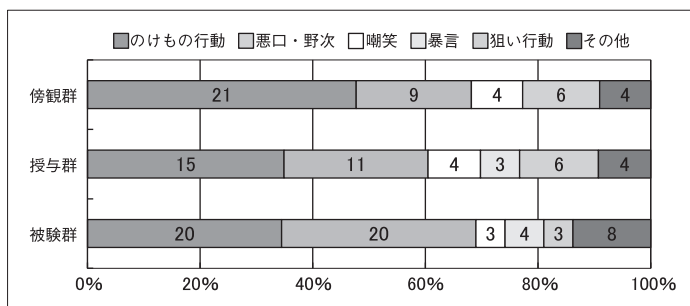


図4 中学校での嫌悪行動の内容の割合

くなることであろう。被験群ではのけもの行動、悪口・野次が多く、嘲笑や暴言を吐かれる体験もみられる。授与群ではのけもの行動、悪口・野次が多くなっている。次に狙い行動となっているが、小学校に比べると大きく減少することになる。授与群は直ぐにのけものにしたり、悪口・野次を飛ばし、ターゲットを決めていることにもなるように思われる。傍観群ではのけもの行動をしている姿を多く観ていることになる。悪口・野次や狙い行動もあるが狙い行動の割合は小学校よりも下がっている。

このように嫌悪行動の内容において、小学校と中学校ともにのけもの行動と悪口・野次を飛ばしたり、飛ばされたりすることが認められる。そして、狙い行動が小学校に多く発生していることが特徴になろう。特に、授与群が狙い行動を取ってしまう傾向が強いようである。傍観する側でものけもの行動と狙い行動を観ていることになる。

3. 種目と嫌悪行動の関係

このような嫌悪行動はどのような授業内容のときに発生しているのだろうか。記述内容を読んでいくと次のような種目が示されている。ひとつは「球技・チーム」というものになる。次に、マット、跳び箱、鉄棒という「器械運動」についての記述である。次に走ることを中心とした「競走」、そしてプールがあることから「水泳」という記述が認められた。他の種目に対する記述は少なく、あるいは種目に触れることなく記述を進めている内容も多かったことから、この4種目と嫌悪行動の関係について明らかにしていく。

図5は小学校での運動種目と嫌悪行動について示したものである。球技・チームでののけもの行動と狙い行動が圧倒的に多いことが認められる。小学校の段階では球技に対するスキルの違いが大きくなる。この時期、子どもたちはスポーツ少年団の野球やサッカーに所属することが多くなり、所属しない子どもは運動から遠ざかっていくという二極化現象の始まる時期でもある。そのために球技やボールゲームができない子どもたちはのけものになり、できる子どもたちはのけものにする側に回るという構造になるのかもしれない。また、狙い行動が多くなる背景にはドッジボールの存在が大きく関わっている。狙い行

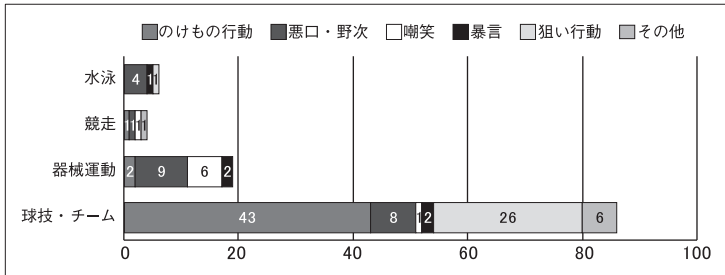


図5 小学校での運動種目による嫌悪行動の数

動の内容では「ドッジボールで狙われた」、「ドッジボールで狙った」という内容が多くなっている。ドッジボールは相手チームの誰かをボールで狙うという種目であることから、ターゲットを設定しやすい種目になっていると考える。器械運動では悪口・野次、嘲笑が発生している。器械運動はできる、できないが明確になるために、できない子どもを野次ったり、笑ったりすることが多くなるのであろう。また、水泳での悪口・野次がある。この内容は体型についての記述がほとんどであった。本来なら隠したい体型があからさまになることで、何かを言ったり、言われたりするという状況が発生しやすくなるのであろう。この点については、注意すべきことのように考える。

図6は中学校での運動種目と嫌悪行動について示したものである。種目の記述が明確でない内容が多かったことから、小学校と同じように4種目についての嫌悪行動を明らかにしていく。中学校でも嫌悪行動の発生する種目は球技・チームが一番となった。その中で、のけもの行動が多く発生していることにな

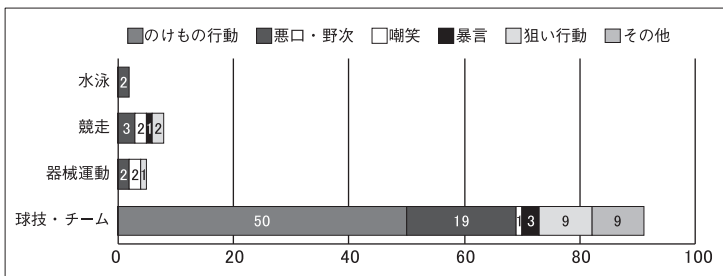


図6 中学校での運動種目による嫌悪行動の数

る。ただ、小学校と相違がみられるのは狙い行動の減少と悪口・野次の増加ということになる。中学校では小学校で行っていたドッジボールが影を潜めていく。つまり、中学校ではドッジボールを実施しなくなることに比例して狙い行動も減少することになったと考える。器械運動での嫌悪行動も減少する。中学校では実施する運動レベルも上がるために全体的に器械運動のできない内容が多くなることが考えられる。自分ができないのに人を非難することはできないという心理も働いているかもしれない。競走ではマラソンや持久走での嫌悪行動が認められる。これも小学校ではみられなかった内容になる。中学校に上がることによって体験する種目による違いや運動レベルが異なってくることが影響するのであろう。水泳の授業も中学校に上がることで減少することになるが、ここでの悪口・野次はやはり体格についての内容であった。

このように嫌悪行動の内容は体育の授業で取り上げられる種目に関連することが明らかとなった。小学校ではドッジボールを通して狙い行動が多くなり、球技やチーム種目ででのけもの行動も多くみられる。中学校になるとドッジボールという種目が行われなくなることで、狙い行動は減少し、のけもの行動、悪口・野次が多くなるということになる。器械運動のできない者、競走での遅い者への悪口・野次、嘲笑が小学校でも中学校でもみられている。また、水泳では体型についての悪口・野次や嘲笑が起きることも、小学校と中学校に共通してみられる現象である。

Ⅳ 考 察

1. 体育授業でのいじめ発生要素

小学校と中学校での嫌悪体験について、その原因と内容から分析を試みた。小学校期は運動をたくさん実施している子どもとあまり実施しない子どもの二極化現象の始まりの時期である。運動の好きな子どもはスポーツ少年団などに所属して、スキルを高めていくことができる。しかし、運動を実施しない子どもは体育の授業だけで運動を経験していくことになる。そのために体育の授業はスキルの違いが明らかにさせる場にもなることを理解しなければならない。

子どもたちは体育の授業を嫌いになっているわけではなく、多くの子どもたちが体育の授業を好きな教科に挙げている(叶, 2014)。しかし、体育の授業が好きではない少数の子どもたちがターゲットになることが考えられる。そのために運動能力の低い子どもたちが、球技やチームゲームでのけもの行動を受けたり、特徴的な子どもが狙われるという現象を被ることになる。また、器械運動はクラス全員の前で子どもたち個々の運動をさらけ出すことになる。すべての子どもが自己の運動の出来、不出来を認識する場になるために、器械運動では悪口・野次、嘲笑がみられることになろう。これは競走でも同じことが言える。走ることが遅い子どもが子どもたちの前で明確になることは、ターゲットになりやすいことを示している。また、水泳の授業では自分の体型を他の子どもたちの前にさらけ出すことになることから笑われたり、野次られることが多くなると思われる。

中学校期になると、ドッジボールを行わなくなることから狙い行動は減少するが、運動能力の低い生徒へののけもの行動やターゲットにしてしまうところがみられる。中学校で嫌悪体験を受けてしまったという授与群において、低運動能力の生徒に対する対応が多くなっていることから理解できる。中学生になると、体育授業において自分よりも能力の低い生徒への風当たりを強くしてしまうことが窺える。

体育授業での種目を通して、注意しなければならない側面がいくつか明らかになってくる。球技やチームでの種目にはさまざまな要素が浮かんでいる点になる。チーム分けの時やゲーム中でののけもの行動や狙い行動である。対象となるのは運動能力の低い児童・生徒であり、クラスで特徴的な児童・生徒ということになる。そのために、どのようにクラス運営や授業運営をしていくのか再検討することが必要になる。器械運動や競走などの個人競技では、児童・生徒の運動能力の高低が明確になっていく。その差が野次や嘲笑として表面化しやすくなると思われる。できない児童・生徒をどのようにサポートするのか、グループ学習での援助の仕方などを考えさせる機会が必要になろう。また、水泳の授業では子どもたちの体型について理解させることが重要になる。中学校では水泳の授業自体が減少すると思われるが、小学校では水泳の授業は現在も

盛んに実施されている。高学年になると体型を気にする子どもたちも多くなると考えるが、教師側の心配りが必要になるであろう。加えて、運動が上手だからゆえにターゲットになるということがあることも理解しておく必要がある。

体育授業で取り上げられる種目によって、のけもの行動や狙い行動などが発生する要素が含まれている。こうした行動がいじめに発展しないとも限らないのである。悪口・野次、嘲笑などはいじめの類型からみれば、あそび型になると考えるが、それがエスカレートしないとも限らない。体育授業での子どもたちの言動に注意を払うことも教師の重要な視点になると考える。

2. 体育授業場面に含まれている背景

いじめについては、さまざまなアプローチからの研究が進められている(藤井, 2010)。その中にヴァルネラビリティ論的アプローチがある。これは被害者側に焦点をあてたもので、被害者にいじめを生じさせるような特徴があることを示している。ヴァルネラビリティとは潜在的挑発性という概念で、相手の明らかな負性、他者への優越性や優れた面の目立ちやすさから生じるとされている。これは運動が上手である子どもは優れた面が、下手である子どもは相手よりも負性が目立つことになり、そのような特徴をもった子どもが対象となることを示している。この状況が体育授業という過度に競争的な心理状態をもたらすことによって、いじめを許す状況が許容されるようになる。

運動場面では、上手くない子どもに対しては、明らかな負性を感じたり、優越感を得ることができる。そのために運動能力の低い児童・生徒をターゲットにすることで優越性が得られることが考えられる。その場面が球技などの勝ち負けにこだわるような競争場面では、ボールを回さなかったり、ミスした児童・生徒に暴言を吐くことが起こるのであろう。器械運動、競走でも同じような感覚を運動のできる児童・生徒は感じているのかもしれない。水泳では身体的な特徴のある児童・生徒に嘲笑が起きるのも相手の負性、自己の優越感を感じ、目立っていることによってターゲットにされることになる。目立っているという点では、運動が上手すぎる児童・生徒も周囲の者からターゲットになると考

える。

ヴァネルラビリティ論的アプローチでは、いじめる側、いじめられる側に限らず、子どもたちが置かれている状況によってそうした特徴が目立ってくることを指摘している。体育授業場面という状況は、上手くできない子どもたち、身体的に特徴的な子どもたちを浮き彫りにさせてしまう場面を含んでいることになる。もちろん、嫌悪体験を受ける児童・生徒の背景も要因として考える必要はあるが、体育授業場面にこのような背景が潜んでいることは理解しておく必要があるだろう。

もう一つの体育授業場面の捉え方として、社会的な行為を動員し、駆り立てるという場面にもなることが考えられる。これはスメルサーの集合行動理論からの捉え方になる(スメルサー, 1973)。集合行動とは社会的行為を再規定する信念が人々のエネルギーを動員して駆り立てていく行動とし、いじめは周囲の人々のエネルギーがターゲットに向かって駆り立てていく状況と考えられる。集合行動を決定する要素の一つに構造的誘発性を指摘し、集合行動の発生を許容しやすい構造的条件があることを示している。体育授業場面はできる、できないが成員に認識される環境になり、嫌悪行動を受ける側の子どもたちがドッジボールで誰かをターゲットにしたり、運動能力の低い人を無視するような構造的条件が整っているように考えられる。子ども同士の運動の優劣が明らかになるという条件が嫌悪体験を誘発させることにもつながるのかもしれない。

体育授業場面において、小学校教諭や体育教員はすべてに眼が行き届くというわけではない。その場面の中に、子どもたちが嫌な思いをする場面が存在し、集合行動が引き起こされるような要因が潜んでいることも忘れてはならないことになる。

V ま と め

体育授業場面における嫌悪体験の記述を分析して、内容について検討してきた。嫌悪体験の原因としては運動能力の低いこと、個人的な特徴、ミスに対して発生している。行動の内容ではのけもの行動、悪口・野次、嘲笑などがみら

れた。また、嫌悪体験を引き起こす傾向の強い種目は、球技が圧倒的に多く、次に器械運動や競走などの優劣が明らかになる種目であった。本研究で、記述された内容がいじめに直結しているのかどうかは分からない。しかし、いじめを発生させるような要素になることがあるのではないかと考える。

嫌悪体験が誘発される理由として、体育授業場面の特異性が考えられる。競争的な心理状態やできる子どもの優位性、できない子どもの劣位性を顕著にする環境であり、ターゲットに対して集合行動が発生しやすい環境であることを理解しなければならない。嫌悪体験を引き起こすような構造的誘発性を潜んでいる人的、物的な環境になっていることが指摘できることから、指導する側の注意を喚起する必要がある。

また、体育授業を行っているクラスの雰囲気や嫌悪体験を助長することも考えられる。教師を含めた雰囲気という点からも今後検討を進めていきたい。

参考文献

- 1) 藤井恭子(2010) 現代日本におけるいじめ過程の解明－いじめに苦しむ子どもたちの救済をめざして－, 皇學館大学出版部
- 2) 波多野義郎・中村精男(1981) 「運動ざらい」の生成機序に関する事例研究, 体育学研究 26: 177-187.
- 3) 叶 俊文(2014) 子どもたちは運動することが嫌いになっているのだろうか－体育への好意の違いと動機づけからの検討－, 体育の科学 64-1: 53-60.
- 4) 文部科学省(2014) 平成25年度「児童生徒の問題行動等指導上の諸問題に関する調査」について
- 5) 中野真也(2012) 「いじめ」概念といじめ問題への対応における変遷－この30年で「いじめ」がどのように語られてきたか－, 日本教育心理学会第54回総会発表論文集, p161
- 6) スメルサーJ.N.著 会田・木原訳(1973) 集合行動の理論, 誠信書房